

佐賀大学全学教育機構紀要 第5号 (2017)

「留学支援英語教育カリキュラム」の成果と課題 －佐賀大学教養課程でのグローバル人材育成の試み－

早瀬 博範

Achievements and Problems
of the International Study Abroad Curriculum:
Fostering Global Citizens in the Liberal Arts Course at Saga University

Hironori HAYASE

Abstract

This paper aims to discuss the achievements and problems of the International Study Abroad Curriculum (ISAC), devised and conducted by the Study-Abroad Curriculum Section in the Liberal Arts Course at Saga University. The ISAC is a specially-programmed course for fostering global citizens who have acquired the high level of English communication skills and international perspectives. The students are selected by the placement test and are required to take about 70% of all the liberal arts subjects, provided by English native speakers all in English in three years. The ISAC started in April 2013, and has made remarkable achievements: half of the students have reached the level good enough to study abroad (TOEFL-ITP 500 and over), and joined short or long study abroad programs very actively. To improve the ISAC program and encourage more students to go abroad, the brush up of its subjects and the stronger relations with the Faculties will be desirable.

【Keywords】 グローバル人材、EAP、留学支援、大学英語教育、英語による授業

はじめに

グローバル化の進展と、日本の人口減少の将来予測などから、大学教育においても、国際的な視野を持ったグローバルな人材の育成が求められるようになり、その要請は年々高まりつつある。もともと日本の大学は、国際基準から見てかなり厳しい評価を受けていたため、その対応にはどの大学も苦慮している。文部科学省も、国際化拠点事業やスーパーグローバル大学事業¹などで後押しをしているが、一部の大規模な大学に限られており、しかも期間も限定的で、広がりを持続性が課題である。

佐賀大学 全学教育機構併任

しかしながら、今後の日本にとっては、グローバルな競争力を持った人材の育成は急務であり、それは、一部の大学だけでやれば済むものではなく、大学の規模によってその規模や方法の違いはあるものの、どの大学においても持続的に取り組むべき重要課題である。

日本がグローバル化を必要に叫ぶ背景には、日本から海外へ行く留学生の減少という深刻な問題がある。この理由としては、若者の内向き傾向など多々あるが、英語力の低下という潜在的問題も大きな一因となっている。現状では、大学が組織的に後押しをしない限り、海外留学をする学生の数も増えないし、最終目標であるグローバル人材も育たない。

そのための手立てとして佐賀大学では2013年度に、海外留学に必要な英語力の強化と、国際的視野を持った人材を育成するための特別プログラム「留学支援英語教育カリキュラム」を開設した。本稿では、そのプログラムの成果を分析し、今後の課題と対策を考察する。

I. 設置の背景

佐賀大学では、グローバル人材育成を目指した特別コースとして2013年度に「留学支援英語教育カリキュラム」を開設した。この特別コースは、ちょうどその年度から授業を開始する、新たな教養課程である「全学教育機構」の重点項目の一つである国際教育を先導するプログラムとして開設し、本学の規模にあった形で構築し、具体化したものである。本節では、その設置の背景について考察する。

(1) 英語力の低下

英語圏への留学を実現させるには、主に2つの条件をクリアする必要がある。1つは、英語力で、もう1つが経済力である。後者の経済力に関しては、近年、本学の国際交流推進センターの努力により、海外協定校と学生の交流協定を締結する際に、両校の学生の授業料を不徴収にすることを条件とすることが可能になっているために、滞在費のみの負担で済むケースが多く、ほとんど障害とはなくなっている。となると、最大にして、最も困難なハードルが英語力である。

英語圏に長期留学をする際には、TOEFL (=Test of English as a Foreign Language) や IELTS (=International English Language Testing System) によって²、その英語力を証明し、留学先大学が要求するスコアをクリアしなければならない。経済的な問題がクリアされたとしても、要求される英語のスコアを出さない限り、留学は不可能となる。具体的には、本学の協定大学へ留学の場合、TOEFL-ITP で500点、IELTS で5.0が交換留学が可能で最低ラインである。

しかしながら、最近の日本の大学生にとって、この留学に必要な英語レベルを達成するのは容易でない。20年ほど前の学生であれば、特別なことはしなくても、TOEFL500点以上は取れていたし、570点を取る学生も少なからずいた。それに対して、最近の学生にとってTOEFL500点の習得は、かなりの努力を要し、なかなか学生の個人的な努力で到達できるレ

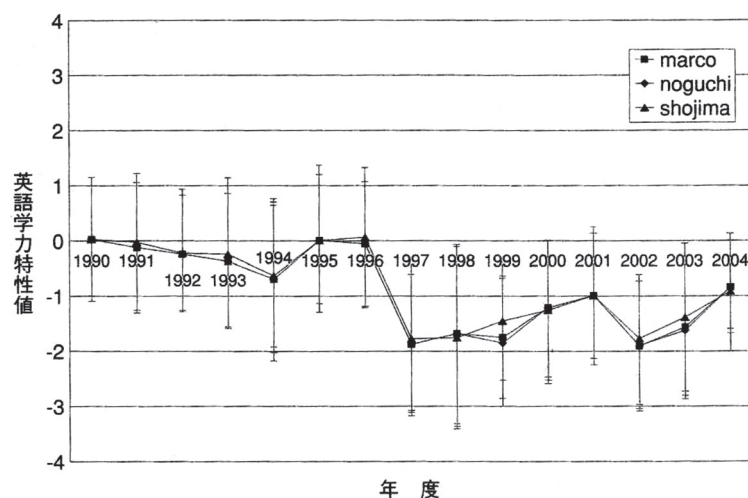


図1 尺度等化後の英語学力特性値の経年変化（各年度平均値とSD）

ベルではなくなっているのが現状である。

これは、佐大生に限ったことではない。吉村他（2005）は、大学入試センターを利用して受験生の英語学力の経年変化を測定³し、図1に示すように、「1996年以前と比較して1997年以降の能力値の平均が明らかに低い」（55）と結論づけている。

さらに、齊田（2003）も、過去8年間に実施された県全体で行われた英語学力テストを用いて高校1年生12万人を調査した結果、「どの学力層においても、高校入学時の英語能力推定値は、8年間で徐々に低下している」（19）と指摘している。つまり、留学に必要な英語力のレベルは20年前も今も変わりはないのであるが、日本の高校卒業時の英語力が低下しているという現状があり、そのギャップは、個人の力に任せておいて容易に埋まるものではない。

このような英語力の低下は、学生の責任ではなく、近年の英語教育改革が影響している。ここ20年、文部科学省は「コミュニケーションの重視」や「ゆとり教育」ということで、高校卒業までに習得すべき英語力のレベルを下げてきた。その明確な「証拠」を、学習語彙数の減少に見ることができる。表1は、中学校と高等学校の学習指導要領が示す最低習得語彙数の推移である。

学習指導要領は約10年ごとに改訂されるが、改訂される度に、その必修単語数が減らされていることがわかる⁴。もちろん単語数が、即英語力ではないが、それでも TOEFL500点以上を取得するには、最低でも4,000語レベルは必要である。最低でもこの程度はないと、アメリカの大学での講義を理解し単位の取得はできない。

単語数だけに限っても、2,200語を完全に習得していたとしても、それを4,000語レベルまで上げるには、相当な努力が必要である。今や大学は学生に、ただ留学せよと言うだけは、

表1 中学・高校で学習すべき語彙数の推移

学習指導要領 実施開始年度		必修単語数		
中学校	高校	中学校	高校	合計
1962	1963	1100-1300	1500-3600	2600-4900
1972	1973	950-1100	1200-3600	2150-4700
1981	1982	900-1050	1400-1900	2300-2950
1993	1994	1000	1900	2900
2012	2013	900	1300	2200

留学が現実のものとならない。学生任せでは限界がある。大学が英語力強化のための具体的な支援体制を構築し、長期的にバックアップする必要がある。

一方、本学では全学的な英語力の強化策としては、2013年度から TOEIC-IP を全ての学生に2回の受験を義務付けることにした⁵。1回目は1年時の前期、2回目は2年時の後期に受験をさせ、教養課程2年間にどれだけ英語力が伸びたかを検証することになっている。これまで4年間実施してきたが、受験率は97%以上あり、1回目と2回目の平均点はすべて2回目が高くなっていて、学生の英語力を維持強化に役立っている。さらに、全学生の平均スコアも年々上昇傾向で、本テストを全学的に導入した意義は大きい。

(2) グローバル人材の育成の必要性

日本は、現在人口約1億3千万人、GDP世界第3位、貿易依存率も37%（2015年）であるために、国際化がなかなか進んでいない。IMD 世界競争力の調査⁶でも61カ国中26位(2016年)で、この5年間ほとんど向上していない。中でも「政府の効率性」、「ビジネスの効率性」は低迷していて、日本の「内向きで伝統的な発想」がランクを下けている要因と言われ、さらに「外国語のスキル」もほぼ最下位に近い評価である。国連の予測では、2040年度には世界の総人口は20億人増えて、92億人となるが、一方、日本の人口は1億人程度に減少する。今はこれでいいかもしれないが、20年後は厳しい状況になる恐れがある。

大学も同様である。大学の世界ランキングの1つ“Times Higher Education 2016-17”によれば、日本の大学は上位100位に2校しかランクインしていない。東大39位、京大91位である。日本の大学がこのように低い要因は学問的レベルというよりも、「外国人教員の比率」と「留学生の比率」が極端に低いためである。国際化されていないということである。外国人にとって働きにくい、英語による講義が極端に少ないなど、具体的な要因である。

日本人学生も以前に比べて、留学する数が年々減少している。「日本人の海外留学者」（2016）によれば、2004年、82,945人だった海外留学生は年々減少し、2013年は55,350人となっている。米国への留学に限って見ると、その減少はさらに顕著で、97年のピーク時の58.4%も減少している。図2が示すように本学においてもそれは同様である。毎年5名以下

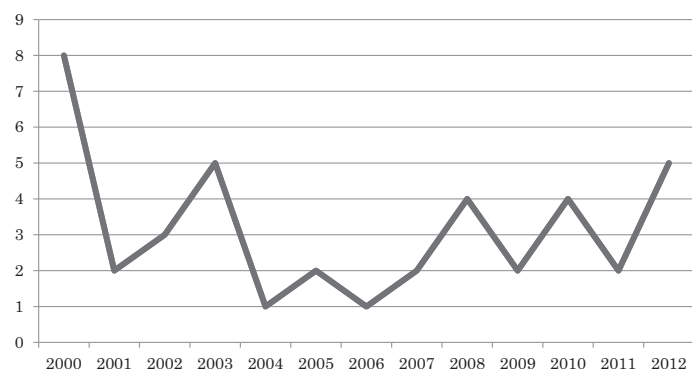


図2 佐賀大学における英語圏への長期留学者数の推移

が続いている。

太田（2014）によれば、その理由として、(1)就職活動の早期化と長期化、(2)単位互換制度の未整備と学事歴の違い、(3)大学での国際教育交流プログラム開発の遅れ、を上げている。

日本の人口は年々減少しており、経済的には市場を海外に求める必要があると同時に、労働人口確保のために外国人労働者への門戸開放は避けて通れない。グローバルな人材の育成は、大規模な大学や大都市にある大学だけが必要なのではない。どの大学も教育の重要なミッションとして取り組むべき時にきている。本学でも、上記のような状況を踏まえ、「グローバルな視野をもつ知（地）の拠点」を大学のキャッチコピーとして、目下、学部を超えて全学的に取り組もうとしている。

本学においては、グローバル教育は、ある特定の学部や学科に必要な教育ではなく、これからは学問の分野を問わず、身につけておくべき基本的な能力と位置づけ、全学的な教育を担う「全学教育機構」の中に設置することにした。そして、その教育を中心的にリードする組織として「留学教育部会」を置き、グローバルな人材育成のためのカリキュラムやプログラムを本学の規模にあった形で企画実施することにした。その中心的なコースが「留学支援英語教育カリキュラム」である。

Ⅱ. 留学支援英語教育カリキュラムの開設

「留学支援英語教育カリキュラム」は2013年度に教養課程である「全学教育機構」の特別コースとして全学部生を対象に開設した。本コースの学生は、一般の学生とは異なる特別な履修方法で教養課程を修了しなければならない。本コースの名称としては、International Study Abroad Curriculum という英語名のイニシャルをとって ISAC（アイザック）と名付けた。（以下、ISAC と表記する）

ISAC 学生の募集は、入会の申請書を入学のための書類の中に入れ、全学部生を対象に希望者を募っている。そして4月1日に希望者全員を集めて、選抜テストを実施し、スコアの上位者から選抜している。本庄キャンパスから40名、鍋島キャンパス（医学部）から10名で

ある。毎年120名ほどの新入生がISACを希望しているが、これは新入生の約1割にあたる数字で、学生のニーズの高さが分かる。

(1) ISACの目的

ISACは、学部を問わず、留学への意欲と一定の英語力を有する学生を対象に、英語による指導体制を授業科目によって教養課程での教育を行い、留学に必要な高度な英語力と、国際的な知識と視野をもったグローバルな人材を育成することを目的としている。最終的な英語力の目標は、コースの全員がTOEFL500点以上の取得である。

(2) ISACの特徴

1) 教養課程の約7割を英語で履修

2年間の教養課程の履修単位のうち、ISACの学生は、以下の表2に示されたものを全て必修単位として履修しなければならない。語学の英語科目だけでなく、自然科学や文化論などの講義科目もすべて英語で受講することになる。合計で24単位になるが、この数字は、教養課程で履修すべき単位数の約7割にあたる。

表2 ISACの履修科目

科目区分	分野	形態	授業科目名	単位数
共通基礎	英 語	演習	Intercultural English: Awakenings	1
		演習	Integrated Speaking: Awakenings	1
		演習	Intercultural English: Bridging	1
		演習	Integrated Writing: Awakenings	1
		演習	Integrated Writing: Bridging	1
		演習	English Test Success: TOEFL I	1
		演習	Integrated Speaking: Bridging	1
		演習	English Test Success: TOEFL II	1
基本教養	自然科学と技術	講義	Breakthroughs in the Modern Age	2
		講義	The Natural World	2
	文 化	講義	Critical Thinking for the Modern Age	2
		講義	Cultural Metaphors	2
	現代社会	講義	Citizenship Education	2
インターフェース	異文化理解・異文化コミュニケーション	講義	Intercultural Communication I	2
		講義	Intercultural Communication II	2
		講義	Intercultural Communication III	2
		講義	Intercultural Communication IV	2

2年間ほぼ英語漬けになる。語学の英語の科目だけに関しても、一般の学生の必修単位数は4単位なので、2倍を受講しなければならない。また、講義科目は、EAP(=English for Academic Purposes)として、内容重視とし、自然科学や文化論、社会科学の内容

を英語で受講することになる。しかも、全てが学期ごとに段階的に高度になるように配置し、全体をシステムティックにデザインしている。授業担当の教員6名は全員留学教育部会に属し、常に情報交換ができる状態にあるので、授業の進め方や内容、さらには学生の反応や進捗状況、出席状況等も全て共有できる環境になっている。さらに、学生の移動が2年間ないという点も継続的指導という点から大きなメリットである。

2) ネイティブ教員による少人数授業

ISACを担当する教員は、筆者以外は全て英語のネイティブスピーカーで、全員が英語教育学の修士号以上を持ったベテランの教員である⁷⁾。しかも語学としての英語科目は1クラス20名の少人数制とし、英語運用能力の強化を目指した。講義科目の方も、コースの学生40名とした。

3) 選抜制

新入生のなかで学部を問わず、将来海外へ留学をしたい人、英語力を高めたい人を対象に、ISACへの入会希望申請書を提出させ、4月1日に希望者全員を集め、選抜試験を実施している。本学の規模からすれば、1クラスの学生数を20名と設定すると、ネイティブ教員の数から換算して、1学年50名程度が妥当な数値となる。

選抜試験は、TOEFL型の問題に加え、課題英作文からなり、全体で約60分である。本学は2つのキャンパスからなり、教員の行き来の問題や、医学部生の時間割のタイトさから、初年度は、医学部生は本コースの対象としていなかった。しかし、医学部生にもぜひ受講させたいという医学部の要望を受け、次年度から医学部生を含め全ての学部を対象としている。ただ、医学部生と他の学部生との学力差があるためと、キャンパスが離れているということから、医学部は独立して10名選抜することにした。よって、2年目(2014年度)からは、本庄キャンパスの学生から40名、鍋島キャンパスにある医学部生からは10名選抜している。本庄キャンパスの学生40名は、上位クラスと下位クラスの2クラスに分けている。

このようにしてISAC学生は、選抜試験を勝ち抜いた学生で、英語力も普通以上あり、しかも自分から希望して参加しているので、高いモチベーションを持った学生ばかりである。彼らは、他の学生とは全く違ったレベルと内容の英語教育を受けるチャンスが得られたことになる。学生自身も、自分たちが選ばれたという意識があり、それもモチベーションの向上につながっている。

(2) 指導方針

ISACの学生は、ある一定の英語力を有し、しかもモチベーションも高い学生たちなので、かなり理想的な英語の授業が展開できる。指導方針として以下の点に留意しながら進めている。

- ① 授業のほとんどを英語のネイティブスピーカーが担当し、インターラクティブな授業により、英語の運用能力の向上を目指して、4技能をバランスよく鍛える。
- ② 英語の言語学的な能力向上だけでなく、異文化理解や国際コミュニケーション能力の育成に必要な講義も全て英語で行う。
- ③ Exposure to English (「英語にたくさん触れる」) を全ての授業で心がけ、実践的な対話、パワーポイント等による口頭発表、質疑応答、ディスカッションなどを取り入れたアクティブラーニングの指導を行なう。
- ④ e-learning の英語教材、特に Graded-Readers を使った多読訓練などの授業外課題により、英語に触れる時間数を確保し、英語力増強を図る。
- ⑤ 定期的に TOEFL 試験を受けることで英語力を測り、弱点を補強することで、更なる向上を目指せるように学習支援する。
- ⑥ 教育レベルを維持するために、単位の履修状況が著しくひどい時は退会させたり、学期ごとに成績によってクラスの入替えを行なう。

Ⅲ. 成 果

ISAC の成果としては、まずこのようなコースが学生たちのニーズに合致していたことが挙げられる。本学の新入生の約 1 割の学生に相当する 120 名～130 名が ISAC への入会を希望している。競争率 3 倍強である。これは、学生たち自身も現在どのような力を身につけるべきかを敏感に感じているということに他ならない。ISAC を設置した意味は十分あるということになる。

ISAC が開講して、今年で 4 年目を迎えているが、すでに 1 年目から顕著な成果を挙げている。英語力、海外研修及び留学の実績、それと学生の評価を通して、その成果について検証する。

(1) 英語力の向上

かなり恵まれた環境で約 3 年間鍛えられた学生たちは、英語力に関しては、ほぼ期待通りの成果を上げている。本学では、全員が TOEIC の受験を義務づけられているので、そのスコアを用いて、ISAC の学生たちがどれほど伸びたかを一般の学生たちと比較したのが、以下の表 3 である。

表 3 ISAC の学生と全学生との TOEIC の平均上昇スコアの比較

入学年度	第 1 回目 TOEIC 平均点 (A)	第 2 回目 TOEIC 平均点 (B)	上昇点 (= A - B)	学年全体の上昇点
2013	552.9	628.6	+75.7	+14.0
2014	562.8	594.4	+41.3	+22.4
2015	553.5	603.7	+50.2	+20.5

まだ3回分のデータしかないが、1年目は、全学生（ISAC生を含む）のTOEICの平均点の伸びが14.0点に対して、ISACの学生たちの伸びの平均値は75.7点と、かなりの差が生じている。2年目も、全学生の平均の伸びが22.4点に対して、ISACは41.3点である。3年目も、全学生の平均の伸びが20.5点に対して、ISACは50.2点とその差は大きい。

さらに、TOEICの試験の上位者10位までに「上位賞」を、それと毎年度、1回目のスコアより大幅に伸びた学生には「ジャンプアップ賞」を与えている。表4は上位賞受賞者のなかのISACが占める人数を示したものである。全学的に競争をさせた場合、留学生や医学部生がほぼ上位を占める。それ以外の学生が上位10名に食い込むのはかなり大変なので、留学生と医学部生の数も参考のために入れている。

表4 TOEIC 上位表彰者に占める ISAC の学生数

実施年度	学期	上位表彰者合計	留学生	日本人学生	医学部生	ISAC 生	備考
2013	前期	11	3	8	5	2	2013年度は医学部にISAC制度はない
	後期	11	2	9	8	0	医学部及び希望者のみ実施
2014	前期	11	3	8	5	3	
	後期	10	4	6	3	3	
2015	前期	11	3	8	6	4	
	後期	10	2	8	6	5	
2016	前期	10	3	7	7	4	
	後期	10	3	7	5	2	

ISACには、高得点者が来ていることがわかる。さらに、表5はジャンプアップ賞受賞中のISACの学生数を示したものである。

表5 ジャンプアップ賞受賞者に占める ISAC の学生数

実施年度	学期	ジャンプアップ表彰者数	ISAC 生	備考
2013	後期	1	0	医学部及び希望者のみ実施
2014	後期	8	4	
2015	後期	4	2	
2016	後期	7	2	

ジャンプアップ賞はかなり厳しいルールで選考しているので、なかなか選ばれないが、その中でもISACの学生は約半数を占めている。これは、約1年半後のスコアの伸びを示すもので、これもISACのカリキュラムの成果と言っているのではないだろうか。

以上のデータが示す通り、ISACの学生は、短期間のカリキュラムにもかかわらず、確実に英語力を伸ばしていると言える。

(2) 短期海外研修や長期交換留学への実績

ISACの主たる目的は、英語による高いコミュニケーション能力の習得と国際的な視野を持ったグローバルな人材であり、最終的には目下低迷が続けている長期留学へ行く学生の数を伸ばすことにある。

ISACの学生たちは、もともと海外への関心が高い学生が集まっているが、それでも教員側の情報提供や後押しは必要である。海外経験のない学生にとっては、やはり一歩踏み出すのはかなりの勇気ときっかけが必要である。よって、授業や授業以外でも教員は海外へ行くことの魅力と意義を機会を見つけて話をしてやり、後押しをすることが大事である。

そのためには、まず短期の研修への参加を促し、海外で学ぶことの価値や楽しさを体感させることが重要であるし、これが最も効果がある。短期で行った学生は、次は長期で留学したくなる。短期であれば、期間も短いので費用も抑えられ、学生にとってハードルが低いため、比較的参加しやすいし、教員側からも斡旋しやすい。

そのような考えから、「留学教育部会」では、ISACの開設と同時にアメリカでの大学での正規の授業を一週間体験できる短期のプログラム“Immersion Program in America”を開始した。実際にアメリカの大学の授業を受け、学生生活を体験し、アメリカ留学とはどういうものかというイメージを具体的に持ってもらうための「ミニ留学プログラム」である⁸。まずはこれに参加をさせ、留学のイメージを具体的に持たせ、次の段階として長期の留学へ繋がることを期待している。この期待は予想以上であり、このプログラムに参加した学生から毎年2名から3名の学生が長期留学を実現させているし、英語力の向上も顕著である。この短期研修プログラムは10名限定の英語力テストによる選抜制をとっているが、その内容と実績から毎年3倍以上の学生の申し込みがあり、最も人気のある海外研修プログラムとなっている。

表6は、ISACの学生の3年間の短期研修と長期留学の実績である。上記のような取り組みから、ISACの学生の半数以上が、短期の海外研修には参加していることがわかる。行き先は、アメリカが半数以上だが、あとシンガポール、オーストラリア、カナダなどである。一度海外へ出た学生は、他の海外研修にも積極的に参加している。

表6 ISACの学生の海外研修及び長期留学の実績

入学年度	在籍学生数	長期留学人数(%)	短期研修人数(%)
2013	29	4 (13.8)	15 (51.7)
2014	43	2 (4.6)	29 (67.4)
2015	40	3 (7.5)	34 (88.0)

課題は、長期の留学の数を増やすことである。表3のスコア表が示す通り、ISACの学生は2年目になると、ほぼ5割が十分長期留学へ行ける英語力を身につけている。しかしそれがすぐに長期留学へ繋がらないのには、英語力以外の様々な要因があることもはっきりして

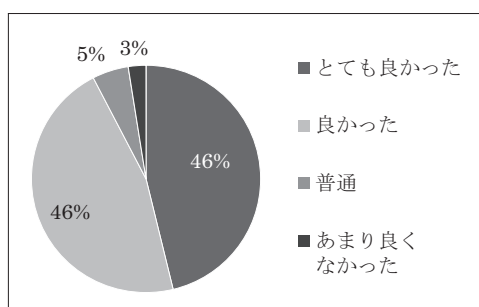
きた。まずは英語力が課題であったが、その他の要因の解決策にも取り組む必要がある。これは大学を挙げて取り組まなければならない。

(3) 学生の評価

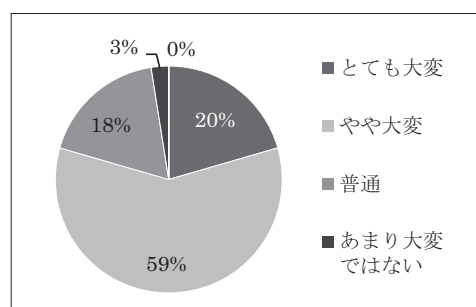
① アンケート調査結果

これまで ISAC で授業を受け、そのほとんどを修了している 4 年生と 3 年生に、ISAC に関するアンケートとコメントを求めた。71 名中 51 名から回答が得られた（回収率 70.4%）。以下は質問とその集計結果を円グラフで表したものである。

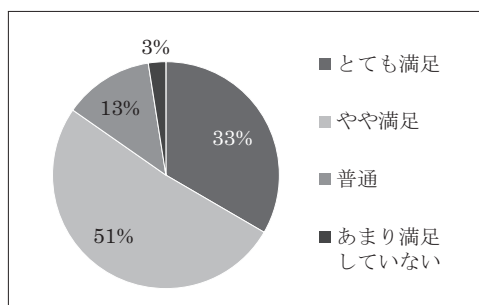
問 1：ISAC に入ってどうでしたか。



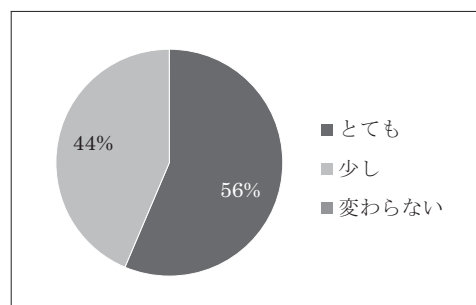
問 3：ISAC の授業は大変でしたか。



問 2：ISAC の授業はどうでしたか。



問 4：ISAC に入って英語が伸びたと思いますか。



上の結果でわかるように、約 8 割以上の学生が ISAC に入って良かったと思っているし、約半数は「とても良かった」と感じている。さらに、約 8 割以上の学生が授業に満足している。ISAC の授業自体は課題も多く大変だと覚悟して入っていると思われるが、それでも実際大変だったようで、約 8 割の学生が「大変」と答えている。しかしながら、英語力が「とても伸びた」と感じている学生が約 6 割もいて、「少し伸びた」という学生も入れると、全員が「英語力が伸びた」と実感している。この結果は予想以上である。努力が報われたとほとんどの学生が満足していると言って良いだろう。このアンケート結果は、ISAC が学生の期待に十分応えられた証拠である。

②学生の声

次に ISAC に関して何でも良いのでコメントしてほしいとして書いてもらった。以下は学生たちの生の声を拾ってみた。

- 実際に ISAC の授業を受けてみて、授業内容が興味深く、ネイティブの先生方は面白く、熱心に指導してくださることに満足しています。高校までの英語の授業では覚えることが主でしたが、この ISAC では「自分で考えること」が多く、それが一番の醍醐味でした。ISAC では異文化を知ることができ、エッセイの書き方、人前でプレゼンテーションをする力、コミュニケーション能力も身につけることができます。(農学部Mさん)
- 私は農学部では英語に触れる機会が減ってしまい、英語の力が衰えてしまうのではないかと考え、ISAC に入りました。ISAC の授業では、発表や話し合いなどを全て英語で行い、先生や他の学生から評価してもらうことで自分の英語力を客観的に振り返ることができます。また ISAC は様々な学部の学生で構成されているため、学部外の友達が増え、しかも英語を将来に活かしたいと考えている人が多いため自分の視野を広げることができ、かつ刺激にもなりました。ただ農学部の人は ISAC の単位が取りづらかったのが少し残念でした。また、もっと留学生と触れ合えるカリキュラムなどを授業で組んでいただけると嬉しいです。(農学部Kさん)
- ISAC は通常よりも英語の授業が多く、課題も多いため大変だと感じたこともありますが、入ってよかったと思う点が3つあります。第一にネイティブの発音で英語を勉強できること、第二に英語での会話・プレゼンテーション・レポートをこなすことで、自分で発信することへの自信がつくこと、第三に母国が日本ではない先生の意見を聞けることです。(文化教育学部Mさん)
- TOEIC の点数が、1 年の 6 月の 460 点、2 年の 1 月 640 点、3 年の 1 月 705 点、と伸びたので、就職活動時の履歴書に書くことができて役立ちました。(経済学部Kさん)
- 昨年11月に留学を決めるまでそこまで意識して勉強を継続したわけではなかったですが、3年間ネイティブの先生の授業を英語で聞いて、答えて、意識してはいませんでした。英語をコンスタントに使う環境に入れたため、いざ英語を本格的に勉強しようとした時にごく短期間でテストのスコアが伸びたり、海外に行った時に思っていたよりスムーズに聞き取れたり話せたり、振り返ってみるとこのプログラムのおかげだったと思っています。(文化教育学部T君)
- 大学3、4年と学年が上がるに連れて、ISAC の授業で学んだことが他の科目でも扱われるようになり、さらに理解を深めることができました。その反面、大学1、2年の頃は教員免許のための講義が多く、あまり ISAC の講義に力を注ぐことができず少し後悔しています。しかし、4年間で自分自身の英語の能力が少し向上したと感じます。ありがとうございました。(文化教育学部N君)
- わたしは大学入学前まで全く英語を話す機会がありませんでした。海外へ行くということも全く頭になかったのですが、ISAC に入って英語を話す機会が飛躍的に増えたり、いろいろ頑張っている友達と出会えたりしたことで海外へ目を向けるようになりました。実際、この4年の間に何度か外国へ行き、充実した時間を過ごすことができてとても良かったです。ISAC に入っていなければずっとその魅力を知らないままだったと思います。ありがとうございました！(経済学部Tさん)

以上のように、当初こちらが計画し、期待した以上の成果が得られた。結果、学生の満足度も予想を超えて高かったのも、プログラムとしては概ね成功と言って良いのではないだろうか。このレベルを保ち、さらに改善をかけ、大学全体の理解と支援を得ながら、成果の出るプログラムに仕上げていきたい。

Ⅳ. 課 題

ISAC は学部を超えた新しい試みで、これまで4年間試行錯誤でやってきた。問題を抱えながらも、高い成果を挙げることができ、年々定着しつつある。しかしながら、解決すべき課題は多い。今後の改善に向けて各学部や国際交流推進センターと協力をしながら進めていく必要がある。以下が主な課題である。

① 学部の授業との調整

ISAC の学生は、本庄キャンパスでは文化教育学部、経済学部、農学部、理工学部の4学部に所属しているために、時間割を作成する際には、まずISACのカリキュラムを最優先で決定し、その時間帯には、原則どの学部の授業も入らないように全学的な調整を行って時間割を作成している。それでも、学部の専門の授業が単発で入ったり、特に理系の実験実習などは長時間を要するために、バッティングすることも少なくない。

このような時に困るのは学生である。学生にとっては、ISACの授業も専門の授業も必修科目であるため、結果、いずれかを次年度に履修せざるをえないことになる。それらがあまり多くなると、ISACのコースからの辞退にまで至るケースも少なくない。ISACの意義への理解をさらに求めていく必要がある。

② 学生のモチベーションの維持

ISACの必修単位の全てを修了するには3年間かかる。しかもISACの授業はその求めているレベルのために、あたかも集中講義のように質量共に大変である。少し気を抜くと単位修得も厳しくなってしまう。モチベーションの維持も容易ではない学生も出てくる。さらに、入学当初は英語力をつけるために頑張り、在学中に留学するぞと、高いモチベーションでスタートしても、いざ大学の生活が始まってみると、専門の授業が忙しかったり、サークル活動に専念したり、バイトが楽しくなったりと、英語学習にだけ集中できなくなる学生も出てくる。学習支援体制の強化は重要である。

ISACから辞退するには、簡単にできないように、筆者と何度も面談をし、やむを得ない場合のみ辞退を認めるようにしている。それでも、やはり1割から2割の学生が辞退している。単位習得が難しく、卒業にまで影響しそうな学生は、ISACに止めておくのも教育上まずいので、相談の上、辞退を認めている。できる限り辞退は避けたいと思うが、ISACのレベルの維持も重要である。

③ 留学しやすい柔軟な単位制度への改変

表3で示しているように、ISACの学生の英語力は、2年目になるとかなり高くなっていて、TOEICスコアの平均値が600点を超えるようになる。これは、TOEFL-ITPに換算すると503点となる⁹。つまり、ISACに所属している約半数の学生は十分長期留学に行けるだ

けの英語力を有していることになる。それなのに、実際に長期留学へ行く学生は伸びていない。どこに原因があるのだろうか。

主な要因は、大学の単位制度にある。留学先大学で取得した単位が、日本の大学では卒業単位として読み替えることがかなり難しいからである。特に理系の学部ではかなり細かい専門科目を履修することが義務付けられていて、その許容範囲も狭いので、留学先で取得した科目の読み替えが認められないというのが実情である。結果、理系の学生は英語力は留学できるレベルに達していても、留学をすることで、確実に1年間プラスして卒業せざるをえないことになる。長い目で見れば、仮に1年プラスになったとしても、留学で実際に得られるものは計り知れないのであるが、学生にそのあたりのことを理解させるには、根気強い話し合いが必要である。

目下、本学の単位互換制度では、一科目ごとに両大学のシラバスを突き合わせて、同等の内容とレベルと判断できるものしか認めていない。かなり厳格な作業である。しかしながら、留学を促進するのであれば、留学先で頑張っただけで単位を取得してきたという意欲と努力を評価し、科目ごとの単位互換でなく、ある一定の単位数を一括して卒業単位として認めるような柔軟な制度に改変すべきである。そうすれば、長期留学に出る学生は確実に増えるはずである。このようなことこそ、大学の国際化ではないだろうか。大学全体として取り組むべき課題である。

④ 留学支援体制の強化

本学では、国際交流推進センターのリーダーシップと、各教員の草の根的な努力により、学生にとって長期留学はかなりいい条件のもとで海外へ行きやすい環境が整っている。留学に必要な情報提供も定期的に行われており、短期プログラムも充実してきている。物理的な環境はかなり整ってきていると言ってよい。あと必要なのは、学生に海外へ行くことの魅力や意義を直接語り、後押しする体制である。今の学生は、堅実で、あまり冒険をしないので、教員側からのプッシュが必要である。本学の場合、ISACではそのような「啓発活動」も重要な教育の一つとして、授業や様々なイベントを通して常に行うように心がけているが、さらに組織的に、国際交流推進センターや学部と連携しながら進める必要がある。

最後に

ISACをスタートさせて、現在で4年目になり、今年度ISAC一期生が卒業の年になる。年々改善を加え、より良いものにしているが、全学部生からなるコースなので、時間割等の課題も多々ある。しかしながら、英語力の向上や、海外へ出かける学生の増加など、明確な成果が着実に出ています。九州一円を見ても、このようなコースはユニークで、受験生にも魅力を感じてもらえるようで、最近では、ISACが入りたくて、佐大を受験したという学生が毎年数名います。

これからの日本にとって、英語による高いコミュニケーション能力と国際的視野の習得は重要な能力となる。どの大学にとっても、そのようなグローバルな学生を育成することは重要なミッションである。その大学の規模や地域の特性に合ったやり方で構築すべきである。本学が行っている ISAC の制度は、規模的には小さいが、明確に高い成果を上げつつある。ただ課題もある。それでもこのような課題を一つ一つ解決していくことこそ、大学の国際化につながるのである。

NOTES

- ¹ 「国際化拠点整備事業」は通称「グローバル30」と呼ばれ、2020年度に留学生30万人を目指したもので、各大学に留学生を呼びこむためのコースなどが整備された。さらに2014年には日本の大学の国際化を先導する37校を「スーパーグローバル大学」と指定し重点的に最大10年間支援する。
- ² 一般的に英語圏の大学への留学に際しては、TOEFL-iBT や IELTS のスコアが要求される。アメリカは TOEFL-iBT、イギリスやオーストラリアは IELTS が一般的である。本学のアメリカの海外協定校では、学生の便宜を考慮してもらい、TOEFL-ITP のスコアでも認めてもらえるように協定において取り決めを行っている。
- ³ ただし、ここで使用された問題は、いわゆる文法問題が中心なので、やや注意を要する。以前の Grammar-Translation Method ではないコミュニケーション重視の教育を受けた最近の学生が、文法力を純粋に問われたら、スコアが低いことは当然かもしれない。「英語力」の定義が、以前と今は違っていることは考慮すべきである。
- ⁴ 次期学習指導要領（中学2021年度、高校2020年度から年次進行で実施）では、小学校で600～700語程度、中学校で1,600～1,800語程度、高校では1,800～2,500語程度となり、最終的に小中高を通じて、4,000～5,000語程度となる。
- ⁵ 詳細は早瀬（2016）の「佐賀大学における TOEIC の全学的導入による英語教育体制の強化」を参照。
- ⁶ IMD 世界競争力（IMD World Competitiveness）は、スイスの国際経営開発研究所（IMD）が発表しているもので、Economic Performance（経済状況）、Government Efficiency（政府の効率性）、Business Efficiency（ビジネスの効率性）、Infrastructure（インフラ）の4項目で測られ順位付けされる。
- ⁷ 筆者は当初、主に授業のコーディネーターや学生の履修や学習相談を担当していたが、やはり授業を担当し直接学生の様子を知ること必要だと考え、3年目から講義科目である Citizenship Education を担当することにした。
- ⁸ アメリカペンシルベニア州にある Slippery Rock University と交流協定を締結し、短期プログラムを両者で企画実施している。これは単なる語学研修ではない。アメリカの正規の授業に参加させるという点がユニークで、重要である。これによって学生は、留学というものを具体的にイメージできる。12日間でホームステイと、2泊3日のニューヨーク研修を入れ、全体で約30万円（往復の航空運賃含む）である。今年度からは、SRU の学生対象にはほぼ同様のプログラムを企画し、本学で受け入れるようになったので、受け入れと派遣の双方向が実現する。

⁹ TOEFL (ITP) テストと TOEIC テストを作成している ETS によれば、両者のテストのスコアの換算式として、「TOEIC スコア $\times 0.348 + 296 =$ TOEFL スコア」としている。

引用文献

- 太田浩. (2014). 「日本人の内向き志向に関する一考察－既存のデータによる国際志向性再考－」ウェブマガジン『留学交流』Vol. 40, 1-19. http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201407otahiroshi.pdf#search=%27
- 齊田智里. (2003). 「高校入学時の英語能力値の年次推移」*STEP BULLETIN* Vol. 15, 12-21.
- 早瀬博範. (2013). 「佐賀大学における TOEIC の全学的導入による英語教育体制の強化－『自律した学習者』の養成をめざして－」『佐賀大学全学教育機構紀要』Vol. 4, 99-112.
- . (2016). 「『佐賀大生を留学させるための TOEFL プロジェクト』の成果と検証」『佐賀大学全学教育機構紀要』創刊号, 43-56.
- 文部科学省. (2016). 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(外国語)」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_5.pdf
- 文部科学省. (2016). 「日本人の海外留学状況」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2016/11/11/1345878_1.pdf
- 吉村幸他. (2005). 「大学入試センター試験既出問題を利用した共通受験者計画による英語学力の経年変化の調査」『日本テスト学会誌』Vol. 1, 152-58.
- IMD World Competitiveness Scoreboard. (2016). <https://www.imd.org/uupload/imd.website/wcc/scoreboard.pdf#search=%27The+IMD+World+Competitiveness+Scoreboard+2016%27>
- Times Higher Education. (2016). “World University Ranking 2016-2017.” https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/0/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats
- World Bank. (2015). Trade(of GDP). <http://data.worldbank.org/indicator/NE.TRD.GNFS.ZS>